

(5) 諸外国の美術教育

国名	学校系統図		A. 教科書 B. シラバス C. 教育制度における美術
	(年齢)	は義務教育	
	6 8 10 12 14 16 18 20 22		
アメリカ			A. } 現在は州の自由裁量 1994年全米の教育改革のもと「芸術教育の全米基準」を受けて「視覚芸術の全米基準」が打ち出されたが反発も強い C. 美術は必修ではなく、音楽、舞蹈、演劇を含む芸術からの選択
イギリス			A. 統一はなし B. ナショナルカリキュラム(1988~) 教育内容の全国基準 C. 5~14歳までの一般学校で必修
ドイツ			A. 教育省の検定 B. 州単位 C. 小学1~2時間/週 中学90分/週
フランス			A. (小)各県で認定リスト (中)自由 B. 学校種ごとに統一 C. 全仏統一 1時間/週 義務教育で必修教科
中国			A. 各学年2冊(題材30~40) 解説より図版中心 (小)県レベル、(中)県又は地区レベルで採択 B. 国基準に基づき地域で基準作成 C. 小学2時間/週、中学1時間/週
韓国			A. 統一 B. 統一 C. 小学1、2年は体・音・美の総合で 6~7時間/週 3~6年は美術で2時間/週

国名	美術教育の特徴
アメリカ	<ul style="list-style-type: none"> 理論研究は高度に進んだが、実践化や検証がなされず、専科の美術教師も少ない。 「視覚芸術の全米基準」に対しては、芸術教育の重要性を喚起しているものの、「地方分権を崩す」、「目標達成評価という効率主義」や画一化といった面でも反発が強い。 近年、芸術が知能とかかわり、人間の知的営みの中でも高次の精神活動と位置づけ、美術教育を問い直す動きが出ている。
イギリス	<ul style="list-style-type: none"> 多様性が基本(統一教科書の不在、中高一貫教育、学校間格差等による)だが、方向性として以下の点あり。 ナショナルカリキュラム 全学年に教科としての継続性重視 成績証明試験制度 学校の授業の成果(提出作品には調査や思考過程スケッチを添える)+外部設定試験 多文化主義 多民族社会での多様な文化の認識学習 批評学習 既存の文化の脈絡との関連付けにおいて、自らの表現を位置付けたり評価する態度
ドイツ	<ul style="list-style-type: none"> 芸術教育運動や、ミュージズ教育のような創造的、情緒豊かな教育とドイツ工作連盟、パウハウスのようなものづくり教育が存在。 小学校ではものづくり中心。中学校では絵画、彫刻、デザイン、絵の分析、プレゼンテーションなど。 学校外での鑑賞教育も盛ん。美術館教育として「芸術遊び」などが代表的。
フランス	<ul style="list-style-type: none"> 以前はアカデミックなデッサン中心主義。 1980年代から各自の個性と志望を配慮した内容へ。(95年指導要領の各科の目標) 小学校図工科 美しさの感覚を養い、児童各自の自己表現の可能性についての意識をもたせる 中学校芸術科 造形美術の概念や表現力を身に付けさせ、芸術の諸様相が理解できるようにする 中学を卒業後、美術をめざす生徒は普通高校の造形美術コースか専門高校に進む。 学校外では美術館による「子供のアトリエ」やその巡回展、スタッフが貧しい地域へ出向くアウトリーチ活動などがある。
中国	<ul style="list-style-type: none"> 小学、中学の内容 絵画、彫刻、デザイン、工作、鑑賞 伝統的な美術文化(水墨画、工芸など)を取り上げる。 鑑賞の題材は中国独自なものや西洋の作品。
韓国	<ul style="list-style-type: none"> 小学3~6年の内容 「美術と生活」「感じの表し」「想像の表し」「見て表す」「飾りとつくり」「筆で表す(文字)」「作品鑑賞」 中学の内容 (表現領域)観察、構想、デザイン、書道(ハングル) (鑑賞領域)韓国と諸外国の作品鑑賞を通じ、自国作品の優秀性を調べる。

国名	学校系統図	A. 教科書 B. シラバス C. 教育制度における美術
	(年齢) 6 8 10 12 14 16 18 20 22 は義務教育	
インドネシア		250以上の多民族国家のため統一が困難 A. 主要教科以外は民間発行 教育省の検定 B. 不明 C. 美術・工芸 2時間/週 + 選択で伝統工芸
シンガポール		A. 民間へ移行(教育省の認定) B. 統一 C. 義務教育で 2時間/週
マレーシア		A. なし B. 統一 C. 初等教育60分/週 前期中等教育80分/週
日本	【参考】 	A. 検定 B. 学校ごと C. 小学校は、「図画工作」で 中学校は、「美術」で

国名	美術教育の特徴
インドネシア	<ul style="list-style-type: none"> ・「手工芸と芸術」科の中で実践。内容は美術、工作・工芸、音楽、ダンス、家庭的な物が含まれ、美術そのものの授業時間は少ない。 ・手を使って物を作ることを基礎とし、その上に美的感覚も養う。 小学校 絵、飾る物、版画、レリーフ、モザイク、編み物、マクラメ等 中学校 彫刻、デザインが増える。
シンガポール	<ul style="list-style-type: none"> ・情報機器を利用した教育内容に重点を置く。(全体の20%) ・民族、宗教を配慮した伝統的内容と、現代社会に通じる内容の両面。 ・初等教育の学年ごとのテーマ 1年「自分自身」、2年「自分の家族」、3年「自分の学校」、4年「隣人」、5年「シンガポール共和国」、6年「すばらしい世界」 内容 絵画、デザイン、立体、工作、鑑賞で偏りなく教材配列 ・中等では、学年が進むにつれ研究的内容が多くなっている。
マレーシア	<ul style="list-style-type: none"> ・統一された教科書はないが、進学試験の制度が厳しく、受験用の美術教育の参考書は発行されている。 ・初等教育の内容 絵画 (想像力、創造性、表現力の育成+鑑賞を表現活動の中で) デザイン (模様のデザインを重視。自由な形、制約された形、伝統的な形等) 構成、工作 (立体的表現、材料と機能の特性について学習) 伝統工芸の紹介(伝統文化の継承、保存を目的) 中等教育では上記の分野がさらに細分化し、技術、技法、知識の習得が多くなる。 ・美術史は西洋とアジアの両方を学習

参考文献

『美術教育の課題と展望』

監修 花篤 實

出版社 建帛社

発行日 平成12年(2000年)5月

『美術科教育の基礎知識』

編集 茂木 一司 福本 建一

出版社 建帛社

発行日 平成12年(2000年)6月